

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520908

研究課題名(和文)イランにおけるアレクサンドロス遠征の経路と実態に関する歴史学的地誌学的研究

研究課題名(英文)A Historical and Topographical Study of Alexander's Expedition in Iran

研究代表者

森谷 公俊(MORITANI, Kimitoshi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：60183662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：アレクサンドロス大王の東方遠征のなかで、アケメネス朝ペルシア帝国の首都スーサからペルセポリスに至る経路を解明した。大王はまず山岳民族のウクシオイ人を平定し、次いでペルシア門と呼ばれる隘路で総督アリオバルザネスの軍勢を破った。ザグロス山中で実地調査を行った結果、これら2つの戦闘地点について、通説ではなくスペック教授の新説が正しいことがわかった。さらにペルシア門におけるアレクサンドロスの迂回路を実際に踏査して、戦闘経過を復元することに成功した。迂回路の学術調査は、おそらく世界初の試みである。以上の成果に基づき、アケメネス朝時代の「王の道」には夏と冬の2つのルートがあったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：I studied the route of Alexander the Great, from Susa to Persepolis. Departed from Susa, he subdued the Uxians, a tribe in the Zagros Mountains, and then defeated the army of Ariobarzanes, a satrap of Persis before reaching Persepolis. I made a field study of these battlefields in the Zagros Mountains, and concluded that not the view commonly held, but the new hypothesis proposed by Professor Speck is right. I investigated the detour route of Alexander in the Persian Gates that is identified as the Mehrian valley near Yasuj, and reconstructed the whole process of the battle. The field survey of this detour route is perhaps the first in the world. These results make it clear that the King's Road in the Achaemenian Age had two routes, the summer route and winter route.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：古代ギリシア史 古代マケドニア史 アレクサンドロス大王 アケメネス朝ペルシア

1. 研究開始当初の背景

ディオドロスのアレクサンドロス大王伝の翻訳および訳注作成の作業を行っている際、スーサからペルセポリスに至る大王の遠征経路について、2002年に発表されたスペック教授の論文が通説とは全く異なる説を提示していることを知った。遠征経路の同定は、大王とペルシア人総督が戦ったペルシア門の同定にかかわり、さらにアケメネス朝時代の「王の道」に全く新たな復元を与えることになる。スペック説の当否を判断するには、イランにおいて実地調査を行うしかないと考えた。

2. 研究の目的

(1)アレクサンドロスの遠征経路のうち、アケメネス朝ペルシア帝国の都スーサからペルセポリスに至るザグロス山中の経路を解明する。そのために、大王とウクシオイ人および総督アリオバルザネスの率いたペルシア軍との戦闘地点を特定し、各々の戦いを再構成する。

(2)2つの戦闘地点を結ぶ経路、およびペルシア門からペルセポリスに至る経路を推定し、アレクサンドロスの本隊および、別ルートをとったパルメニオンの輜重部隊の進路を明らかにする。

(3)以上に基づいてアケメネス朝時代の「王の道」の具体的なルートを再構成する。同時に2つの戦闘をペルシア側の視点で見直し、ペルシア人総督の戦略を再評価する。

(4)アレクサンドロスによるダレイオス3世追撃の経路をたどり、ダレイオス3世の死亡地点の候補地とされるダムガンとシャルードを訪問して、どちらかの都市を特定する。

3. 研究の方法

(1)アレクサンドロス大王伝のうち、アリアノス、クルティウス、ディオドロスの3篇の記述をあらためて詳細に分析し、戦闘地点を特定するための具体的な手がかりを得る。

(2)ザグロス山中で実地調査を行い、大王伝の記述と照合して2つの戦闘地点を同定する。さらにペルシア門の戦闘については、アレクサンドロスの迂回路と推定される経路を実際に踏破し、戦闘経過を具体的に再構成する。

(3)実地調査の成果に基づいて「王の道」のルートを再構成する。その際には、ペルセポリス周辺における近年の考古学の成果および、近代の西洋人が残した旅行記をも活用する。

4. 研究成果

(1)山地ウクシオイ人がマケドニア軍と対峙した隘路(以下、ウクシオイ門と称する)は、スーサから東へ直線距離で約90キロ、現シュウシュタルから約25キロのザグロス山脈入口にある。少数の部隊で大軍を阻止するには理想的

な地形であり、スペックの仮説は正しいことを確認した。アレクサンドロスがまず突破したのは山脈入口の峠であり、ペルシア人メダテスが立て籠った町はその先の渓谷の出口にあったと考えられる。

(2)ペルシア門は通説のファーリアン渓谷ではなく、現ヤスジの北西5キロのメーリアン渓谷である。岩落としの崖、ペルシア軍本陣跡は、いずれも史料の記述に完全に合致する。

マケドニア軍は隘路に進入したが、高みからペルシア兵に攻撃されて退却した。その夜、アレクサンドロスは現ガンジェー村付近から迂回路を取り、ペルシア軍陣地北側の山裾を進んだ。そしてペルシア軍後衛部隊の背後に現われ、これを突破してペルシア軍本陣を攻撃し、総督アリオバルザネスは敗走した。

2泊3日の登山を中心とする実地調査によりこの迂回路を特定することができた。他方で迂回路に関するスペックの仮説は地形と合致しない。

(3)マケドニア軍の経路は次のように再構成できる。

スーサ出発後、南のアフワーズではなく東へ向かい、カールーン川を渡って平地ウクシオイ人を服属させた。続く山地ウクシオイ人との戦闘は限定的な作戦であり、輜重部隊を率いる必要はない。それゆえアレクサンドロスはパルメニオン率いる輜重部隊と分かれて戦闘部隊のみを率い、メダテスを降伏させて山地ウクシオイ人を平定し、大量の家畜を獲得してハフトゲルで平地に降りた。ここでパルメニオン部隊と合流し、平地の道を進んでからベーヘバハーンで再び輜重部隊を分離した。

アレクサンドロス自身は山中に入り、デーダシュトを経てカールーン川沿いの平地に出、メーリアン渓谷に到達した。ペルシア門を突破した後は南東に進路を変え、平坦な土地をドルーザン経由で走破してペルセポリスへ到着した。

一方パルメニオン部隊は本隊から分離されたのち、ベーヘバハーン付近からほぼ今日の幹線道路に相当する道をたどった。それからファーリアンないしヌーラバードから南東へ向かい、ベイザ、マルヴダシュトを経てペルセポリスへ到着した。

(4)ダレイオス3世がエクバタナに滞在していたため、ペルセポリスを守る任務はペルシス州総督アリオバルザネスに課せられた。彼はウクシオイ地区の長官メダテスと連携し、まず山地ウクシオイ人の抵抗によってマケドニア軍の侵攻を遅らせた。ウクシオイ人が降伏すると、アリオバルザネスはペルシア門に大部隊を配置し、万全の態勢でマケドニア軍の侵攻を阻止しようとした。ペルシア門は守備側にとって理想的な地形であった。しかしアレクサンドロスの迂回作戦は全くの想定外であり、結局アリオバルザネスは敗走を余儀なくされ、ペルセポリスからも閉め出されて戦死した。

ペルシア門の戦闘は、マケドニア軍にとってはペルセポリスへの途上で起きた一つのエピソードかも知れない。しかしペルシア側から見れば、それは首都ペルセポリスを侵略者から守るための一大決戦であり、アケメネス朝最後の戦いとして再評価しなければならない。

(5)アケメネス朝時代、スーサ～ペルセポリス間の「王の道」には、夏のルートと冬のルートがあったと考えられる。夏のフーゼスターン平野は猛烈な暑さだが、ザグロス山中のカールーン川沿いはそれほど暑くなく、冬には積雪がある。事実、後継者戦争に関するディオドロスの記述によれば、スーサの東の渓谷を抜けた先にペルセポリスへ通じる快適な山の道があった。これは現マスジェド・ソレイマンを通過してペルシア門に至る夏のルートを指すであろう。一方、現シューシュタルからベーヘバハーンを経て、ファーリアンないしヌーラバードを通る経路は冬のルートであったろう。

(6)スペックは、ペルシア門とスシア門が別個に存在したと考え、スシア門を現パタヴェーの南西に位置する小村アバデー付近のタモラディ渓谷に比定した。しかし私の実地調査では、ここを関門と見なすことには疑問が残る。私自身はデーダシュトからアバデーへ至る経路を探索したが、実際に通り抜けることはできなかった。スシア門に関する結論は保留したい。

(7)「王の道」についての仮説は、アレクサンドロスの経路に新しい光を投げかける。スーサを出発したアレクサンドロスは、まず夏のルートを通して山地ウクシオイ人を制圧し、一旦平野

に降りて冬のルートを進んだ。それからベーヘバハーンでパルメニオン部隊と分かれ、山中を北上して再び夏のルートに至る。ペルシア門を突破してさらに夏のルートをたどり、ペルセポリスに到達した。

このようにスーサからペルセポリスに至るアレクサンドロスの行軍は、アケメネス朝の交通体系をそっくり利用してなされた。彼の進路はまさしく「王の道」によって規定されていたのである。

(8)前330年6月、アレクサンドロスはテヘランの南ラガイ(現シャフレ・レイー)を起点としてダレイオス3世を追撃した。従来の研究により、彼が1日ごとに宿営した地点がおおよそ特定されている。それらを順にたどり、アイヴァネケフ、南カスピヤ門、アラダン、アブドルアッバード、ラスジェルド、セムナンを訪問した。ダレイオス終焉の地については、ダムガンとシャルードの2つの説がある。アリアノスの記述によると、アレクサンドロスはセムナンから砂漠を通過する近道を走破した。よってセムナンに近いダムガン付近が彼の終焉の地であったと考えられる。

ダレイオスの埋葬を指示した後、アレクサンドロスは後続部隊をヘカトンピュロスに集め、遠征の継続を兵士たちに訴えた。ヘカトンピュロスは現クシェ村の南5キロのシャヘ・クミスの丘に比定されている。地元住民からの聞き取りにより、遠くからではあるが、これを特定することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

森谷公俊「イランにおけるアレクサンドロス遠征路の実地調査」2013年5月20日、日本西洋史学会(於京都大学)

森谷公俊「イランにおけるアレクサンドロス遠征路の研究」2012年5月20日、日本西洋史学会(於明治大学)

〔図書〕(計1件)

森谷公俊/鈴木革(写真)『図説アレクサンドロス大王』河出書房新社、2013、140頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森谷 公俊 (MORITANI, Kimitoshi)
帝京大学・文学部・教授
研究者番号：60183662

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：